

朝起きると、枕元には一枚の書置きがあつた。丁寧な字でこう書いてある。

『新しい僕へ。僕は今の人間関係、生活環境その他諸々。どうにも生き辛くなつてしまったので、過去を捨てることにしました。記憶を失つた訳ではありません。頑張つて自由に生きて下さい。宜しくお願いします』

なるほど、確かに自分が誰だつたのかも、何をしていたのかも思い出せない。いや、正確には思い出せないのではなく自ら放棄したのだろう。

しかし、起き抜けに頑張つて生きろと言われても、そう行き先の思いつく人間はいない。まずは自分の状況を把握しなくては。ひとまず周りを見渡した。

部屋は綺麗に片付いている。男にしては——そう、俺が男なことくらいはさすがに分かる。男にしては几帳面な性格だつたのだろう。立掛けてあつた写真には、美形と言っても差し支えない、おそらく自分が写っている。俺は同じ顔だが、同じ表情が出来るかまでは分からない。これも一つの遺影となるのだろう。

他にも好きな作家の本、好きなアーティストのポスターなどを見つけた。どの本も内容は覚えているし、曲名を見ればメロディーを口ずさむことだつて出来る。でもどうして自分がそれらを好きだつたかはまる

で思い出せなかった。記憶喪失は日常的な道具の使い方などは忘れないと聞くが、それとはまた違う……まるで人伝の情報を見ているかのようである。

とりあえず部屋を見渡して分かることと言えば、まあこんな程度だ。部屋を出よう。これ以上のことは、いるかも分からない家族に訊くのが手っ取り早い。

部屋を出て階段を降りるとリビングに出た。広めのリビングは自分の部屋同様に片付いており、新居と言っても不自然ではない程に綺麗である。そして、飾ってあるインテリアや家具から、単なる綺麗好きではなく、我が家が比較的裕福であることまで分かる。

少しずつ情報を集めながらリビングを見渡していると、その奥から人の声がした。

「起きたの？ 荒人？」あらいひと

そう言って恐る恐る出てきたのは、中年の女性だった。部屋同様に小綺麗な身なり。一見上品だが、やや神経質そうな目をしているように見えるのは、過去の記憶の残滓のせいとは言い切れないだろう。知らない女性だ。でも状況から誰か分からないこともない。

「母さん……なのかな？」

産声にも似た台詞を俺は吐いた。母親らしき人は、初めはやや怯えていたようだが、すぐにホツとした表情になりこちらに寄ってきた。

「良かった……。昨晚は妙なことを口走って部屋にこもっちゃったから、てっきり家出でもするんじゃないか……。でもそんなことするわけないわよね」

「あ、いやあーまあ、その……うん……」

俺はただひたすら、あうあうと赤ん坊のように呻くしかなかった。

「——と言うわけで、俺は今日までの過去は捨て去ったから、あなたのことも良く覚えてないんだ」

「つまり記憶喪失なのね？」

がつくりと俺は肩を落とした。まあ普通はそう取られてしまうだろう。だからこそ腰を据えて説明したのだが、一向に理解してもらえない気はしなかった。

「可哀想に……。確かに最近は何々と忙しかったし、一時的に混乱しちゃうのも仕方ないかね。分かったわ。しばらくはゆっくり休みなさい」

母らしき人は言った。理解はされなかったが、理解ある母親であったのは救いである。いくら日常生活の記憶はあるとは言えど、いきなり普通の生活に馴染むのも難しいと思っていたのだ。これでひとまずは落ち着けると安心してしていると、母は続けて言った。

「それでも学校は勿論ちゃんと行くとして、今日の分の習い事は課題として、後で先生に送ってもらいましょう。直接行けない分、量は多めにしてもらわないとね。それで今日一日休んで、明日からはちゃんと全部の習い事も予備校も頑張りなさいね」

「……………」

再び部屋を見渡す。壁一面に並んだ数々の賞状。特賞や最優秀賞といった文字が安売りにされていた。そして一際立派な紙には『四当五落』と掲げてある。

眩暈のするような景色を見たところで、ようやく俺の職業が判明する。

優秀な受験生。真っ白だった俺のスケジュール帳は、1時間もしないうちに暗転していった。

——それでも彼が逃げ出すにはまだ足りない。

その1時間後には、学校へと到着していた。

自分がどこの高校に通っていたかは訊かなくてはならなかったが、場所に関しては問題なく覚えていたので、来ること自体に苦はなかったは救いだ。

自分の所属しているクラスでは、教室に入るなり複数の同級生が挨拶を投げかけてきた。俺としては孤立しているくらいのほうが、状況的には楽になっただろうが、皮肉なことにかつての自分はクラスでもそれなりに人気のある存在だったようで、男女問わず声をかけられ、何人かには様子がおかしいと勘繰られてしまった。仕方なしに俺は今朝のことを説明する。

「信じられないかもしれないけど、実際みんなの顔見ても初対面としか思えないんだ」

それを聞いて中には冗談だと思いきや、多くは怪訝な表情を浮かべて怪しんでいる。冗談か？

おかしくなったのか？

からかわれているのか？

怪しみなければそうすればいい、俺自身でさえ自分の存在が不透明なものにしか思えないのだ。

そんな不穏な視線の奥で一人の女子生徒が勢い良く教室に乗り込んできた。

「ちよつと荒人っ！ 過去を捨てたとか、覚えてないとかどういふことなのっ？」

女の子は人波をかき分けつつそう言った。可愛いと言うより美人と言える容姿をしているが、釣り目気味の目は怒りで更に吊り上り、その眼光は言葉以上に熾烈にこちらを突き刺していた。彼女はその綺麗さを装飾でなく、全て武器として身にまとっているようだ。

「まさか私のことまで忘れてるとか言わないでしょうね？」

「えつと、それは」

「あなたの！ 恋人である私を！」

彼女の怒声に一瞬教室が静まり返る。しかし、特別それを騒ぎ立てる様子がないところを見るに、彼女のこういった言動は初めてのことではないようだった。

「ごめん、悪いけど今の俺には良く解らないんだ。自分のせいとは思わないけど、怒ってる原因が自分にあることは確かだし、謝るよ」

俺としては事を荒立てないように説明したつもりだったが、彼女にはそれが煽りにしか思えなかつたらしく――

バシんツ！

その平手打ちが彼女の答えだった。

「何言ってるの？ 馬鹿じゃないの！」

怒りで震えるようにそう吐く。やれやれ、分かってはいたが聞いては貰えないようだ。これはいくら謝ったところでどうにかなるものでもないだろう。

俺は改めて彼女に向き直し告げる。

「今のは昨日の自分の不始末に免じての一発だ。だけどだ、次からはただの他人の暴力としてしか受け取らないからな」

反抗の言葉は予想外だったのだろう。彼女は怒るでも悲しむでもなく無言で立ち尽くしていた。

俺は彼女は本来被害者ではあると思う。しかし同情はしなかった。彼女は昨日の自分が、たとえ消滅しても捨てたかった忌まわしき過去の一部なのだから。

一旦授業が始まってしまうと、学校はなんてことのない平穏な日常へ変わった。授業も問題なくついていける。クラスメイトは時々好奇の目を向けては来るが、今朝のこともあり積極的には声をかけて来ない。そうして俺の登校初日は呆気ないほどの平和さを維持したまま放課後を迎えた。

休み時間もたまに質問をしに来る者はいたが、曖昧な返事しか返せないでいると次第に話しかけてくる人は減り、終わりには空気のような扱いになっていた。確かにそれは気楽ではあったが……だが、ここが

自分の場所でない感覚は否が応にも感じてしまった。

(やっぱり学校にわざわざ来る意味なんて……)

明日からどこへ行こうか——そんなことを考えていると不意に後ろから肩を叩かれた。

「よう、荒人。あ、と言っても分からないだっけか？ ははっ別にお前の言ってることを信じてるわけじゃないけど、一応初めましてって言っとくか」

声をかけてきたのは、彼曰く比較的仲の良かった友人であるらしかった。「とりあえず話は帰りながらしようぜ」と言う彼に従い、俺はようやく冷静に話が出来そうな相手に安堵しつつ通学路を遡る。

「それにしても今朝のあの女の顔は笑えたな」。俺はお前ら二人のことは前から知ってるけど、あんなこと言うお前も、あんな顔するお前の彼女も初めて見たわ」

別に嫌味で言った訳でもないようで、心底面白そうにそう語る。

「そんなに珍しいことなのか？」

「珍しい珍しい！ と言うか昨日までのお前がむしろおかしかったんだけどな。俺の知ってる限り、お前が誰かに反抗してるの見たのも初めてかもしれないし。ほとんどの人は恋人同士つつーより単純な主従の関係と思ってたくらいだろうな。いつもなら殴られたって踏まれたって、ニコニコ笑いながら謝ってるだけのお前があんなこと言ったら俺だって驚くわ」

家にあつた写真の笑顔思い出す。あれは楽しくて笑っている笑顔だっただろうか。思い出せない。

「まあ元々俺はあの女好きじゃねーけどな。お前の顔が良くて逆らわないのが良くて付き合ってるのが見えなかったし、お前もただあいつに一方的に合わせてるだけにしか見えなかったよ。他人の俺がとやか

く言うのも何だがお前の母親にしたってそうだ。ただ優秀で言うことを聞くだけのお前を疑いもしてなかった。俺に言わせてみればそんな人付き合いでも何でもない、ただお前の人生を貪ってるだけだ」
貪られた。過去の俺は自分で捨てたと言っていた。しかし、実際には家から時間を削られ、恋人に意思を削られ、自らの性格で自由を削り、削り切ったその果てに消えてしまったのかもしれない。だとしたらこの俺は何なのだろうか。

「……とりあえず色々教えてくれてありがとう」

どこへ行くべきかは更に分からなくなってしまったが、自分の来た道だけは何となく分かった。そのことについて友人に礼を告げる。

「ははっ！別に大したことじゃねーよ。それでこれからどこに行くんだ？」

「とりあえず学校は辞めるかもしれない」

残っていてもかつての自分を知る人たちを混乱させてしまうだけだろう。しかしそれを特別残念とは思わなかった。そう、この感情はまた別の……。

そう言うと友人は寂しそうな顔をして言った。

「そうか……仕方ないな。そうだ、こんな時に言うのも何だが、実はお前にひと月前いくらか貸してあったの思い出したわ」

彼は寂しそうな——惜しむような顔で続ける。

「今のお前には寝耳に水かも知れないけど、今後会えなくなるかもしれないしな。あー今手持ちがなくて大丈夫。いつものように家の前で待ってるからよ」

そうだこの友人らしき男も自分も感じているのは寂しさなんかじゃない。

「悪いな。金なら返せない——いや、貸せない」

確かに過去に金を借りていたかどうかは分からない。しかし俺はこいつの表情を知っていた。恋人が向けていた視線よりも更に即物的なその表情を。

「ああ？ 話だけ聞いて借りた金も返せねーのか？ 荒人のくせに！」

先ほどまでの悲しむような表情とは違い、明らかな敵意と侮蔑をこちらに向けてきている。

しかし、俺の中で渦巻いていたのはそれ以上の怒りだった。

勉強で縛り付けた親にか？ それもある。

人を利用し続けた恋人にか？ それもある。

目の前のこいつにか？ それもある。

だがそれ以上に許せないのは、それらの責任を投げ捨てて、俺に押し付けた昨日の自分だ。いくら支えきれないほどの重責でも、それだけを捨てるなんてそんなことをするべきではなかったのだ。自由に生きるというのなら、それは逃げる行為を押し付けただけに過ぎない。

「何黙ってんだ？ とりあえず出すもの出せば今日は見逃してやるって言ってんだから、はやく——」
バキッ！

「がっ……っ！」

とりあえずうるさい口を殴りつけて黙らせる。口から血を流しながら目を回す元友人の横を通り過ぎつつ言った。

「学校辞めるのはやめた。家も出ない。どこにも行かない」
昨日の自分は過去を捨てたと言っていた。そして自由にしろとも言っていた。なら奴が捨てたものを捨てるのも俺の自由だろう。捨い尽くして返しに行く。それが俺の選択であり、最初の抵抗だ。

俺は捨いものをするために日の落ちかける学校へ再び足を向けた。